

Title	Myth and meaning in Early Taoism. Theme of Chaos (hun-tun), Girardot, N.J.
Sub Title	
Author	茂澤, 方尚(Mozawa, Michinao)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.60, No.1 (1991. 4) ,p.141- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19910400-0141

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

Myth and meaning in Early Taoism.

Theme of Chaos (hun-tun). Girardot, N. J.

University of California press. 1983.

茂 澤 方 尚

『老子』第25章は、「物有り混成し、天地に先んじて生ず。寂たり冥たり、独立して改らず、周行して殆まらず。以て天下の母と為すべし。吾れ其の名を知らず、これに字して道と曰う。強いてこれが名を為して大と曰う。大なれば曰に逝く。逝けば曰に遠く、遠ければ曰に反る。

故に道は大、天も大、地も大、王も亦また大なり。域中に四大有り、而して王は其の一に居る。人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然に法る。」（金谷治氏の訓読を一例として挙げておく。同氏著『老子』

（講談社刊、昭和63年2月）

その「混成」を解して同氏は「渾成の意味で、全てを

つつみこんで一つにまとまっていること。混乱の意味にみて、「道」をカオスの状態で考えるのはよくない。とらえどころのないものであっても、そこに自らかな秩序だったものがある、「道」とよぶのはそのためであろう。」
と言う。

服部武氏の『老子』（富山房刊、一九八八年四月）ではこの章について、「これは道が天地より究極のもので、始めも終わりもなく、生滅を超えた、もともとあるものだということをいうものであるが、今は、右の混を取り上げる。混は混沌とすると、道はカオスということになる。たしかに第十四章に、混じて一つとなる(2)とある

から、道は正しくカオスのなものと見えるが、一方、混は渾と通用、渾大、まろく大きい、渾和、まどかに和らぐ、という熟語の示すように、まどかに纏まっているという意味とすることができる。即ち統一と見ることができると言う。

というように、解釈は不安定である。これはごく最近の『老子』研究の一端をあげたままで、他にもいろいろと解釈がある。

服部氏は「象徴的に語る、表現するということは老子に限らず、中国的思想表現に幾らもあることで、たとえば、孔子は道がすべての人にとって身近で日常必須のものであることを人が部屋への出入りに不可欠の戸口に譬え（雍也17）、莊子は自然が生きたカオスであり、それに人為を加えると、自然は死滅することを渾沌（のっぺらぼう）という世界の中央の帝王に目鼻の孔を付けてやったところ、何と死んでしまったという寓話で象徴的に語る（『莊子』内篇第七応帝王9）例などがある。」とも指摘している。この『莊子』の渾沌をこの書は副題として、『老子』の第二十五章、この評のはじめの引用から Girardot 氏の検討が始まる。序にあたる部分は、私には難解であるが、この研究が、仏西中国学の成果、わけ

ても M. Granet や H. Maspero 等の先学に啓発され、前の流れを汲む、Levi-Strauss 的な人類学的考察やら、宗教についての新しい考え方を打ち出している等、刺激に富むが、一一これをとりあげれば、とうていこの評者の理解力を超えるので、ここでは割愛する。ただ甚だしく刺激的であることを重ねて言っておくこととする。

さて、Girardot 氏は、『老子』（『道徳経』）を基本的にどう理解するかと言えば、蔣錫昌著『老子校詁』によるが、基本的には、Chan Wing-tsit, *The Way of Lao Tzu*. 1963 の英訳によっている。『老子』の欧米での訳は山室三良著『老子』（明德出版社、昭和四十二年三月）に1960年までに出版された主要な訳書の解説があつて甚だ便利であるが、そこには、1963年刊の Chan Wing-tsit 氏の著作は含まれていない。私は『老子』の専門家ではないから、その訳については沈黙しておくこととする。

ただし、この第二十五章が大切であるからその訳を挙げて参考に供しよう。

There was something chaotic yet complete [yu wu hun ch'eng],

Which existed before the creation [sheng] of heav-

en and earth.

Without sound and formless [chi hsi liao hsi],

It stands alone [tu] and does not change.

It pervades all [t'ung hsing] and is free from
danger [pu tai];

It can be regarded then as the mother of the world
[t'en-hsia mu].

I do not know its proper name but will call it
Tao.

If forced to give it a name, I shall call it great.

Great means "moving away" [shih].

"Moving away" means "far way" [yüan]

And "far away" means [ultimately] to return [fan].

『老子』第二十五章の英訳の引用はここである。中途
半端といわざるを得ないのであるが、賢明で要を得た引
用とも言える。という訳は、この章は、第一章、第四章、
第六章、第十四章、第二十一章とともに「道」の定義を
企図した部分であるとともに、「自然」という重要な名
辞が最末句に登場しているからである。

やや長い引用になるが、この章の山室三良氏の解説を
みておこう。

「二十五章はこれまでの説明を基礎として総括的に概

念的に説明しようとしている。道は天地より先とする。

それは決して物ではないが、『物あり混成、天地に先立
って生ず、寂たり寥たり。』という以外にない。混成と
いう二字をとってもそれを文字通り訳しても意味は分ら
ない。しかし 'formless yet complete' (ボッデ)とい
う訳し方などはやはり苦心を示している。最初の句の訳
を例示すれば、

There was something in a state of fusion before

heaven and earth were formed,

How tranquil, How void it is;

Duyvendak

There was something nebulous yet complete,

Born before Heaven and Earth.

Silent empty,

de Bary

王弼は、「混然として得て知るべからず、しかして万
物これに由りて成る、故に混成という」と註して成を成
るの意に解している。あまり文字を理づめにつきつめて
も老子は分らないが、私は、成はレッグ以来、ヒューズ、
ボッデ、ド・バリなどが 'complete' と訳している方を

取りたい。天地万有以前からあるこの道は、『寂たり、寥たり、独立して改まらざる』ものである。王弼は寂も寥も形なきこととしたが、寂は声なきことと解した上述二つの英訳はいい。声もなく形も無く、超感覺的のものであり、何物にも依存しない。相対的のものは必ず何物かに依存し、限定されているが、道は何物にも限定されない。それ自身によっているもの、その意味で完全な自律、独立、自足である。……道は

変化流転する現象の根本にあるもの、この根本あるが故に変化流転も可能である。……道は宇宙に遍満周行して無有限であるから、強いて名づけてこれを大という。その大は限りない生成運行であるから、往くという意味で逝という。限りない運行は遠くへ行く。そこで遠という。遠く往くのは、ひたすら彼方へ往くばかりではない。必ず反つてくる。「反は道の動なり」(四〇章)で、道の動きは循環である。……『王は地に法り、

地は天と法り、天は道に法り、道は法ること自ら然り。』或る人は自然を入れると五大になるとして、読み方に苦心をする。しかしこの時代には未だ‘nature’としての自然という用語はない。自然は、自から然りと読む以外

に無い。‘nature’としての自然が出るのは六朝以降である。老子にあっては‘nature’は道であり、天である。この自然はいわゆる‘nature’ではない。「道法自然」というのは、道は自からそうなる、道には他の規準は何もない、道は無条件であるという意味である。次の諸訳は適切である。

Tao's standard is the Spontaneous. Bodde

Whilst the Tao models itself being what it is. Hughes

Hughes

The Way conforms to its own nature. Blakney

Tao follows the law of its intrinsic nature.

Chu' Ta-kao

Tao follows the way of itself. de Bary

The Tao came into being by itself. Needham]

という。「道」と「自然」ととの関係は、諸英訳にみるように、「働き」「活動」と「自然」を訓む方が良いようであるが、そうすると「法る」がわからなくなる。

「道法自然」でよくはないか。松本雅明氏は『中国古代における自然思想の展開』中で、「自然の自は自己であり、然は然り、または然りとすという肯定の言葉」だと主張された。又「人間の意識を離れて、純粋な自然

物」を考えぬ「構造」があると指摘した。

しかし、『老子』第二十四章は、「希言自然。故飄風不終朝、驟雨不終日。孰為此者、天地。……」という。物理的自然をその厳しさにおいて、観察していたことをこの章は証すると言えまいか。

先の服部武氏は、「以上は道と無との関係に着目して第一章と第四十章とによって道と無との自同を述べたものであるが、次に第一章ですぐ知ることのできるものであるが、道の背後には天地がある。つまり、天地を下敷きとしていることに着目しよう。その天地というのは古代中国の民族信仰上のもので、自然の別名といえるが、そういう自然について注目すべきものがある。……、……、古代中国の思想の自然観には、……、……、それにも二様の見方があって、それ（自然の現れ）を天の意志による現れ（『左伝』成公十三年文の周の劉康公の説など）とするか、情意というものを超えて、もっぱら物理的な働きによる現れ（『左伝』昭公二十五年文の子産説）とするか、二様の路線がある。すでに、老子以前にこの二様の見方が見えているが、老子は後者に属する。老子の道の背後には上のような情意抜き働きという自然の認識があり、そういう自然（天地）観が道の思

想の背後に見えつ隠れつ付いて廻ることを無視することはできない。」ということを描している。「自然」を「道」の働き、自己運動と読むのが適当なのだろうが、そうではないとする新説もあることを私はひどく興味をもって考えている者である。私の『老子』についての観点はごたごたしてはいるが、服部氏に近い。

さて、Girardot 氏の問題関心は、その自然（天地）形成以前にある。

そういった問題への関心は、日本にもあって、たとえば、山田慶児氏の「空間・分類・カテゴリー、——科学的思考の原初的、基底的な形態——」には『莊子』の応帝王篇の「南海の帝を儵と為し、北海の帝を忽と為し、中央の帝を渾沌と為す。儵と忽と、時と相与に渾沌の地に遇う。渾沌、之を待つこと甚だ善し。儵と忽と、渾沌の徳に報いんことを謀りて、曰わく、「人みな七竅有りて以て視聴食息するに、此れ独り有ること無し。嘗試みに之を鑿たん」と。日に一竅を鑿つに、七日にして渾沌死せり」を寓話ではなく「抽出された神話」と考え、「莊周がたしかにおこなったであろう操作は、ふたりの脇役に名づけることであった。儵と忽はいずれも瞬時を意味する。」「中央にすむ渾沌（渾敦あるいは混沌とも書く）は

古い神話の主人公であった。人と神と獣と、三つの相貌をもって、渾沌はわたしたちのまえにたちあらわれる。

『春秋左伝』文公十八年によれば、帝鴻氏、つまり、黄帝の息子である渾敦は、おなじく少暉氏の息子の窮奇、顓頊氏の息子の檮杌、縉雲氏の息子の饕餮とならんで、四凶とよばれた悪漢であった。黄帝・小暉・顓頊は堯舜にさきだつ神話的な聖王、、、、四凶を世界の涯てに追放し、魍魎魍魎の番人にしたのである。、、、この人間くさい渾敦が、ほかの聖王伝説とおなじく戦国時代の思想家たち、とりわけ儒家による創作であるのは、あきらかだ。」という。そして『山海経』西山経に伝える渾敦のほうが、おそらく神話の原型を、すくなくともその相貌に関するかぎり、はるかによく伝えている。天山に神がいる。その名は渾敦、姿は黄いろい袋みたい、火のように赤い火をはなち、六本の足と四枚の翼をそなえている。この渾敦には面目、つまり、顔や目がない。だが歌いかつ舞うことができる。渾敦は実は帝江である、、、帝江は帝鴻、すなわち黄帝にはかならぬ、と『山海経』に言及し、「渾沌の生とそれがもたらす不安とその死、この三つの要素を、莊周はみごとに抽出してくる。渾沌は無秩序の、あるいは、秩序に属

しないことのシンボルである。」と分析する。「渾沌神話はもともと宇宙生成神話である。この神話から、あるいは、この神話をふくむ神話群から、のちに気の無限宇宙論、ないし、宇宙進化論が発展してくる。」とも指摘している。

Girardot氏は、『老子』第二十五章の「混成」という名辞が、「渾沌」の転訛、あるいは改竄ではないかというE・エルケスの説を引用している。この章に神話学的残基を承認するとすればというエルケスの注意を介して、その宇宙卵宇宙起源論にふれ、この第二十五章は「天地の誕生に先立って宇宙卵という物があつた」と読むべきであるとするエルケス説に注目する。転訛とか改竄とかとは私は見ないが、哲学思想の与件として神話伝説を考慮すべきだとは考える者である。

次いで、蔣錫昌の指摘、つまり、混(渾)(暗に、渾沌)なる名辞は、『老子』において、明確に「道」と結合されていること、又『老子』第二十章で、道家的聖人が、馬鹿(愚)な心を保つことと、「渾沌と愚鈍さ」の状態を保つこととは、『莊子』にみられる神話学的渾沌の状態に照応すると言う司馬光説の蔣錫昌の引用、及び第四十九章、聖人的支配者は、その心を「渾沌的に統一し

た」(渾其心)は、第二十章の「沌沌昏昏」(原文を引用すると我愚人之心也哉沌沌兮、俗人昭昭、我獨昏昏、
、であるが)は主題的に関連づけ得るとする蔣錫昌注
に言及し、かてて加えて、混(渾)は、第二十章の昏(昏)
と同音的同一であるが、意味論的相似によっても又支持
されると主張する。昏(昏)は、たとえば、婚に関連し、
馬鹿、混乱、あるいは愚鈍の観念を暗示する。『老子』
第三章の「無知」= 'no knowledge (再び評者はここ
に原文を引用しておく。、、、是以聖人之治、虚其心、
實其腹、弱其志、強其骨、常使民無知無欲、
、、、)、
これらの多くの名辞は道家の無知あるいは no-knowle-
dge の状態という重要な主題を結果的に示唆する渾沌の
観念に結合した。

木村英一氏の『老子の研究』(創文社刊、昭和三四年
一月第一刷、昭和四六年十月第二刷)訳によれば、「
……だから聖人の政治は「人民の心を虚しく腹を實させ、
(無智ならしめ、且、
衣食を足らしめる)志を弱く骨を強からしめ、(柔順ならし
め、且健康な
らし)常に民をして『無知無欲』な(自然の状態にあ)ら
しめて、」と解釈している。

大同小異だが、山室三良氏は「賢を尚ぶことは儒教の
伝統である。前十一世紀周建国の哲人周公且もしきりに

哲をいう。哲とは深い知をさす。周公は先哲王の名をく
りかえしあげている。孔子も「賢を見ては斉しからんこ
とを思い」「賢を賢として色に易え」「賢を尊びて衆を容
れる」ことを心掛けている。賢を尚ぶことを学派の主目
標にしたものに墨子学派がある。「墨子」には尚賢とい
う篇がある。孔子学派や墨子学派が賢を尚んだのに老子
は反対する。賢を尚んで人材を登用すれば、人人は野心
を起す。野心を起せば安らけさを失い、人と争う。老
子はかくて知を尚ばない。

老子は同時にまた文化を否定する。文化と称して人は
とめどなく外界にふりまわされる。いわゆる文化の向上、
今日いわれる消費やレジャーがはたして人を幸福にする
かどうかは疑わしい。人はいつでも幸福でなければなら
ないと老子は考えるが、幸福は外界に眩惑されるところ
にはない。まして富を求めて本心を失うようなところに
幸福はない。老子は原始の素朴の中にこそ幸福があると
考える。従って聖人の治は、無知と素朴とのうちに、静
けさと調和とをたもつところにあるとする。法家は老子
のこの面を取って、反文化主義、愚民政策を施した。老
子の真意は決して法家のような反文化政策、愚民政治に
あったのではない。民をして文化の害毒から免れさせる

ところにあつたのである。」と言う。御説ごもつともとも、わかつたようでわからないとも言えそうである。

ついでに、服部武氏の解説は、「右は孔子の説く賢をとうとぶということ(里仁17、子張3)、さらには墨子の尚賢にも反対するもの、、、、学問や知識が有為であり、人を欲望に導くことは言外に明らかであろう。しかし、そういう欲望にはまた人と競争する(そして、それに勝ちたい)という欲望がある。右の第三章には、この競争という欲望ぐるみ欲望の否定ということがあると行ってよい。」と言ひ、「さて、今まで述べて来たところで知ることのできるものであるが、老子の排する主要なものに五つある。知識・学問・欲望(食と性以外の欲望)・礼・競争がそれである。、、、、うのは文明以前の原始素樸な状態への復帰を狙うものであろうか。たしかに、老子の説くところに従うならば、人間は人間の母なる道に密着してこそ人間なのであり、それを離れば、それだけ非人間化する。老子の道の世界には孔子のそれと違って発展とか進歩ということはない。人間の進歩とか文明化ということは自然との距離を大きくし、生の真実さの稀薄化、生の空白化の証とする。

この観点において老子は太古原始の素樸さへの回帰によって人間の諸悪の結晶ともいった文明の超克を人間の理想として構想するものといえるであろう。」と言う。御託宣痛み入るのであるが、文化と文明とがよほど気に入らないらしい。私は「太古原始の素樸さ」などという文明文化人のユートピア等は話としては、批判としては、これを認めない。東京の文化と文明になずんでいすれっからしの、しかし田舎ぺいである私は、こういう解説に正直いってとまどう。学問や知識のなさに困惑して、赤恥をかいている己を嗤っていいのか、哀しんでいいのか。

己のことはさておいて、Girard氏は、第一章、第二十章、第五十二章、第五十九章に、「道が世界の母と称されていることに注意している。(ここでも又評者はその原文を挙げておく。第一章、有名萬物之母。第二章、而貴食母。第五十二章、天下有始、以為天下母、既得其母、以知其子、既知其子、復守其母、没身不殆。第五十九章、有國之母、可以長久。)これらをさまざまに神話学の反映とみて、宇宙的祖先的巨人、動物、Great Motherと関係するとする。地母神と称される者とも関連があるかも知れない。原文に即した慎重な考察が求め

られよう。

そして『莊子』の「渾沌」に考察が進む。Granet氏の論文によって説明される一節を含むが、いかにも中国らしい美しい解説があるが、欠点がないわけではないが、私はGranet氏の『中国文明』を読むことをついではなからすすめておきたい。

つづいて、『淮南子』と『列子』を素材に考察は進められ、興味深い、「卵、ひょうたん、大洪水、」が考察される。伊藤清司氏に「人類的両次起源—中国西南少数民族的創世神話—(民族文学研究所収)があつて、あわせて読まれるとよいかと考える。「渾沌」にふれながら、「道家の神秘主義の象徴的様相」といったことを検討されている。

Girardot氏の考察は、あらゆる側面から「渾沌」の考察をするが、それは、the Sino-Tibetanの語族の独創ではない、という洞察を証拠だてているように考えられる。日本の学者では、松本信廣氏や井筒俊彦氏等の研究成果を踏まえていることも、この研究の大きな枠組を理解するのに役立つであろう。

ゴジラやモスラ、ワンタン、なまず絵、フロベール、ヘルマンヘッセ、ドストエフスキー、ダダ、シュールレ

アリズム、毛澤東等々への言及は、Girardot氏の博學を語る一端だが読む方はなかなか大変で、へたをすると消化不良を起しかねないが、中国の初期道家の研究に新しくみてみずみずしい地歩を築いていると私には思われた。この評は、『老子』の一部分にふれて、私見をちょっと混じえただけであつて、Girardot氏のほんのどっかかりの部分にしか言及していないのである。それでも結構骨が折れた。「花有り酒有り春常に在り、燭無く燈無く夜おのずから明るし」という句が念頭を去らない者のたわ言として笑覧に供する。